
パートナー

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パートナー

【Nコード】

N0956J

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

クリスマス目前、ということ、これまた去年の作品を。

最近、ムーンライトノベルズの方での長編書き直し以外は、BLからすっかりごぶさたしております。古いものばかりで、申し訳ないです。

刑事の佐藤は、クリスマス・イヴにチキンを下げた派出所を訪れる。そこに、恋人が制服警官として勤務しているからだ。佐藤の希望は、恋人の顔を見たいだけ。しかし、訪れた派出所では、胸が痛

いよつな出来事が待っていた。

佐藤は、両手にファーストフードのビニールをぶら下げて雑踏の中を歩いていた。

今日はクリスマス・イヴ。年の後半から急激に押し寄せてきた不景気の波も、繁華街のイルミネーションを見ているかぎりは感じられない。道路沿いの銀杏並木はきらびやかに彩られて、あちこちのショーウィンドウにはクリスマス・ツリー。ケーキの販売員はみなサンタの格好をしている。すれ違う人々も、デートなのか着飾って若いカップルなどは手をつないで歩いていた。

それを、佐藤はほんの少し羨ましいと思う。この風の冷たさだ。恋人同士が温めあって、それを咎める無粋な人間はいない。

（まあ、俺には縁がないな）
そう呟く。

ゲイである自分の場合は、人前ではふざけて肩を抱くくらいしか恋人と触れ合えない。それ以前に、十二月から一月にかけては心の休まる時がない。どのみち、仕事が待っている。

佐藤は、警察官だ。所轄に配属されてすでに七年。制服警官から刑事課に配属されて数年経っている。

警察官にとつて一番嫌な季節は二つ。子供が夏休みに入っている時期と、この年末だ。そして今年は、近年類を見ないような不景気になって、どんな凶悪犯罪が起こるかとは非番のときでも身構えている。

そういう時に見たいのは、恋人の顔。

ちらりともいいから、と佐藤はわざわざ大量のチキンを買って歩いていた。向かう先は、数年前まで佐藤が配属されていた派出所だ。繁華街の外れ、巨大な交差点のそばにあつて管轄範囲は広い。デパート等の商業施設だけでなく、歓楽街もその中にある。夜も昼も、常に十人内外の人員が詰めていて、その忙しさは所轄随一と言

われている。

そのこの巡査部長は、過去佐藤の上司だった。制服警官一筋で、勤続二十三年。下手なチンピラなら頭を下げて通り過ぎるぐらいに有名だ。

やがて、二階建ての建物の入り口が見えてくる。煌々とした灯りが歩道まで伸びて、それは困っている人々にとっては大事なものだ。警察とは、いつまでもそうでなくてはならない、と佐藤は素通しガラスの嵌まった引き戸を開けて中に入りながら思う。

「お疲れ様です」

そう言っただちに入れば、むうつとするほど暖かい。床が打ちつぱなしのコンクリートのために、暖房を効かせてある。それは中で勤務している警察官のためでもあるし、落し物や道を聞くために訪れる人々のためでもある。

「何しにきたあ、佐藤！」

この派出所は、内部も広い。二階は書類棚と仮眠用の三段ベッド。一階のほとんどは対応の窓口にあてられているが、奥には給湯室とトイレ。まれに、トイレを借りに駆け込んでくる市民もいた。

「嫌だなあ、沢田さん。何しに、はないでしょう。しばらくお顔を拝見していませんでしたからね、その元気なダミ声を聞きに来ました」

佐藤は言っただけで、隅っこの窓口に寄っていた。そして、差し入れ、と言っただけで両手のビニール袋を渡す。

「気が効くじゃねえか」

「こういう日に、手ぶらってのもね」

まあ、中に入れよ、と言われて佐藤は奥のデスクに巡査部長と向かい合っただけで座る。そうして、さり気なく恋人はどこだろう、と視線を動かしていた。

恋人は、現在ただいま市民との対応真っ最中だった。

佐藤からは左手に見えるカウンターに、年輩の親父と向かい合っただけで座っている。その親父の背後には、しみのついたコック姿の中年

の男が腕組みをして仁王様みたいな表情で立っていた。

「なに、やらかしたんです？」

佐藤は、こつそりと巡査部長に訊く。

「ああ、あれか。無銭飲食だよ」

言つて太いため息をつくのを眺め、佐藤は「たまりませんね」と言う。どういふ事情でかは知らないが、誰しも交番勤務をやれば無銭飲食には必ずぶつかる。食い逃げをした、と大人しく交番に引つ張られてくるタイプのほとんどは、そもそも抵抗する気もない。その被害金額にしたところで、せいぜい牛丼一杯分かラーメン一杯。それを払えない、というところによりきれなさを感じる。それが、今年が多い、と巡査部長はまたため息をついていた。

不況なのだ。不況の波が押し寄せて、一番弱い部分から墮ちていく。それが今年は顕著で、現場の最前線にいて毎日パトロールをしている制服警官は、身にしみて感じていた。佐藤にしてもそうだ。街中を歩いていても、つい警察官としての目で物事を見てしまう。

「そういえば、来る途中花咲通りを抜けて来ましたけどね」

と、佐藤はこの周辺で有名な歓楽街の名前を出していた。クリスマス・イヴという事で、平日でも人通りは宵の口の時間帯でもかなりのものだった。若いカップルが目立ってひとり者には目の毒。しかし佐藤が言いたいのは、そういう事ではない。

「あれ、何ですかね。ヤクザが巡回してましたよ」

警察がパトロールをするのではなく、ヤクザが自分のシマを見回るなど、前代未聞の珍事だ。しかも、連中の場合には疑わしきは排除せよ。エスカレートして暴行事件にならないかが心配だった。

「荒れてんだよ、佐藤。不景気で、素人が荒れてんだ。そうになるとヤクザと違って限度を知らねえからな。この前なんか、ぼったくりバーで仕事切られた男が暴れまくって店ん中を滅茶苦茶にしゃがった。その店の雇われ店長が逆に怯えちまって、手に負えません、って泣き事こぼすぐらいだ。洒落にならねえ」

牧歌的な交番風景など、元からこの派出所には縁がない。しかし、

それほど酷くなっているとは思いませんでした。そんな場所に、恋人がいる。

それを思うと佐藤は、自分がこの道に恋人を引っ張りこんだ事を後悔しそつになつていた。

佐藤が、口説いたのだ。後を追いかけてこい、と佐藤が口説いた。もともと、恋人とは高校のOBと後輩。口説き文句は今思うとなんてセンスがないのだろう、と恥ずかしいが、それでも恋人は「はい」と素直に頷いて自分の後を追いかけて来ている。

それが、愛おしい。そして、心配になる。

警察官など、自分ともあれ恋人の性格には向かないような気がした。

「で、佐藤。お前今日は日勤じゃねえのか。なんで、こんなところにいるんだ」

巡査部長の言葉に、佐藤は苦笑していた。

「言いますかね、そんな事。イヴに一人なんて理由は一つです」

そりゃまあそうか、と返ってきた言葉に頷いていると、恋人がこちらに向かつて来る。

こういう時、恋人が親しげな顔をしない事を佐藤は知っている。

逆の場合もそうだ。佐藤も会釈だけして、何も言わない。

「どうした、鈴木」

巡査部長に、恋人が答えていた。

「カレー屋の店長は、被害届を取り下げました」

「目出でてえじゃねえか」

それが、と言い淀んでいる恋人を、佐藤は横目で見上げる。

ひと当たりのいい笑顔とやわらかな童顔。ひよろつとした体型で、誰が見てもやさしいお兄さんにしか見えない。歳は佐藤の五歳下になる。おまえは交番の道案内向きだ、と周囲からしょっちゅう言われているらしいが、それも頷ける。佐藤もそう思うからだ。

「帰っていいと言われても、帰る所がないそうです。一晩だけいいから、ここに泊めて欲しいと」

目を伏せているから、長い睫毛に恋人の悲しげな瞳が隠されていた。

次に来る、巡査部長の言葉は佐藤でもわかる。恋人もわかっているだろう。はたして、馬鹿を言うな、とダミ声が厳しく言っていた。

「ここは、救護所じゃねえ」

が、恋人は直立不動で立ったまま、頷かない。でも、と反抗的に口が開いて言い返した。

「この寒空です。今夜は零下まで気温が下がります。それを、追いつ返すんですか」

普段はおとなしいが、いったんへそを曲げるとテコでも動かない。それを知っている佐藤は、巡査部長が大きく口を開きかける直前、椅子から立ち上がった。

「沢田さん、俺の後輩ですから。俺が言い聞かせます」

横から言えば、恋人が顔に似合わずきつい表情で睨みつける。来い、と腕を取れば手ひどく振り払われていた。

「嫌ですよ!」

「いいから、来いよ。沢田さん、上は?」

「空いてる」

無然とした表情の巡査部長が入れ替わりに男の対応に出て行くのを見送って、佐藤は恋人を引きずって行く。抵抗しても、佐藤の方が体格はいい。それに、こんなところで感情的にはなりたくないのだろう。唇を噛んで俯いているのを、引っ張って二階に上がった。

二階は、エアコンを消してあるから冷え込んでいた。吐く息が白く見えて、それがどんどん気温を下げていく戸外の様子を思わせる。

佐藤は、恋人が言った「この寒空」という言葉に心の中で頷いていた。

ホームレスとして戸外で寒さに耐えている人々の事を、何とも思っていないわけではない。地下鉄からの暖気が噴き上げてくる場所にいる彼らを、パトロールの警官達はよほどでないかぎり見て見ぬふりをしている。公園のダンボールの家も、苦情が来なければ黙っ

て通り過ぎる。追い立てたりはしない。そこを追い立てても、彼らはまた別の場所に移動するだけだ。そこが、最初の場所よりいい、とは誰も思わない。

エアコンを入れて、恋人をベッドに座らせると佐藤は言う。

「全員は、助けられないんだぞ」

見下ろせば、恋人はまだ唇を噛んでいる。くやしさに加えて、なにか焦燥感に駆られてでもいるようだった。

「わかってます。でも、今日ぐらいは。一人ぐらいはいいでしょう？」

出来ないんだよ、と佐藤はため息をついて隣に腰を下ろしていた。「ひとりだけ特別扱いは無理だ。誰かが話を聞きつけて、ここに押し寄せるようになれば目もあてられない」

だって、と恋人が消えそうな声を出していた。

「なんだ？」

「だって……今日は、クリスマス・イヴですよ。本当なら、そういう日なんでしょう？ 俺達警察官は、市民を助けるんでしょう？」

まいったな、と佐藤は心の中でため息をついていた。

その通りだ。今はもう、そんな意義など忘れられかけているが、警察官の制服は、昔は威力があった。法の番人、弱い者の味方。交番などは、困った時の頼れる場所だった。最近では、警官の怖さも薄れるばかりだ。下手をすると、高校生あたりでも怖がったりしなくなっている。

佐藤は恋人の顔を見つめながら、スーツの内ポケットから携帯を取り出すと、ある番号を検索してかけていた。

隣では、相手にされなかった、とそっぽを向いている恋人がいる。腹を立てたのだろう。急に立ち上がって出て行くこうとする恋人の手を掴んで、佐藤はそっと指をからませ握っていた。ここにいろ、と目だけで言う。そういう無言のやりとりの間に、電話がつながっていた。

相手は、大学時代のクラブの先輩だ。現在は役所の福祉課に勤務

している。

簡単な挨拶のあと、佐藤はその相手に事情を説明していた。視線の先には、驚いている恋人の顔。怒っていた表情が消えて、少しずつ嬉しそうになっていく。

そうだ、と佐藤は思った。もし、形にならないプレゼントを貰えるとしたら、恋人の笑顔がいい。

「うちの会社は基本、その手の保護はやりませんから。先輩の方で心当たりはないですか」

訊けば、ある、と言ってくれた。手帳にその場所の電話番号と住所をメモして、佐藤は礼を言っていると電話を切る。そして、そのメモを破って恋人の手に握らせた。

「先輩がボランティアで、自殺防止ネットワークの仕事をしている。その教会の神父が受け入れてくれるらしい。一時的だが、食事もある。今夜、その先輩は一晩中そこにいるそうだ」

恋人が、なんともいえない笑顔を見せた。

やさしい、春風を思わせる笑顔。その笑顔は、幾つになっても変わらない。変わって欲しくない。佐藤にとって、一番大事なものだ。微笑みかえせば、ふわつと両腕が首に回ってきた。

「ありがとう、ほんとに」

その身体をゆるやかに抱いて、佐藤が訊く。

「覚えてるか、俺の口説き文句」

「覚えているよ、もちろん」

佐藤は、むかし恋人にこう言った。

大学三年の進路に悩んでいた頃だ。

なあ。俺と仕事でもパートナーにならないか。佐藤と鈴木。超平凡な名前のイケてる捜査官コンビ。

そうしたら、恋人は「あぶない刑事だね」と面白がって頷いた。

それが、こんな世界と違っていたかどうかはわからない。佐藤でさえ、いろいろとシヨックを受ける事態に直面したし、これからもする。そして、この笑顔を守るためならパートナーとして、公私と

もにカバーしていくつもりだった。

「健一」

「なに？」

「俺は明日が夜勤だ」

警察官には、クリスマスなど関係ない。特に若くて独身の場合は、家庭持ちの先輩に休みを譲って家族サービスをさせるのが暗黙の了解だ。

「じゃあ、夜勤明けたら俺が弘樹の家に行く」

それも、手に余る事件が起こらなければ、の話だ。交替の数時間前に事件が起こって、所轄の刑事が出てくるようなのにぶち当たれば、恋人が部屋に来るのは遅くなる。それもまあ、仕方がない、と佐藤は思う。それがこの商売の因果なところだ。よくわかっている。「チキンを、食べよ」

やっと抱擁をとくと、佐藤は言って小さなキスをしてから、気はやるらしい恋人を下に行かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956j/>

パートナー

2010年10月8日13時41分発行